

わたしはずっと「境界」というものに惹かれてきた。

これまでの旅行の目的地も、境界線が多かったことに気がつく。たとえば学生時代の旅での、壁が崩される前の西ベルリンから東ベルリンへ入るチェックポイント・チャーリー。返還される前の香港から中国本土・広州への道のり、サンディエゴからメキシコ・ティファナへの喧噪の検問所。はては、ただ赤道をまたいで南半球と北半球に足を置きたい一心で、新婚旅行の行き先はエクアドルとなった。

「文化精神医学」や「医療人類学」という得体の知れない学問を専門にしたのも、そういった関心の延長だと思う。境界を越えるとはどのような経験なのか、異文化で生きるとはどういうことなのか（ちなみに、もうすぐ星和書店から拙著『異文化を生きる』が出版予定です）。または、一見自然に支配され、普遍的にみえる病気や医療が、文化の境をこえるだけでなぜこれほど違う様相を呈し、人々の異なる意味づけや異なる反応、異なる対処法をもたらすのか。そんな問いにどんどん魅せられ、引きこまれていって、気がつけばいつのまにか、臨床医と研究者の二足わらじの道にすすんでしまっていた。

そして、わたしはもう一つ別の大きな意味での「境界」へもずっと関心をもってきた。それは、学問領域間の境界である。学際的な研究をずっとしてきたことから、これは身をもって断言できるのだが、学問領域にはそれぞれかなり独自の文化が存在する。その学問ごとの言語（専門用語）はもちろん、そこに集う人々の価値観や生活様式、はては時間感覚や空間感覚まで異なることも多い。そして、学問ごとの文化は、通常の意味での文化（民族文化とか地域文化）よりも、それぞれの差異が時に激烈で、越境が困難だとも思う。なまじ同じ地域に住み日本語が通じるものだから、異文化ということがわからず、相手の無理解に双方が苛立ち、結局は「棲み分け」という安全だが実りのない道に自足してしまいがちになる。

この4月から私は、一橋大学社会学研究科の地球社会研究専攻の一員になったのだが、それまではずっと医学部に所属していた。すでに述べたように以前から学際的なことをしてきていたし、方法論としても人類学や社会学の概念や手法を使っていたから、研究内容としては特に大きく変わるわけではない。それでも、実際に移ってしてみると様々な違いに気づく。「医学」という枠組みの狭さに批判的であったにもかかわらず、それなりに自分が医学的な価値観、たとえば最終的には言葉よりも行動、理論よりも結果を重視するようなプラグマティズム、に染まっていることなどは、物理的に距離をおいてみてようやく気づいた。

大学高等教育は専門家を育てるのが目的であった。進学率の上昇によって大学の役割が徐々に変わり、時代の要請もあって、総合研究などの学科が設定される場所も増えてきた。一橋でも大学連合が正式に動き出した。私はそれらの動きを歓迎するし、学生にもどんどん学問の垣根を越えて、どんな欲に知識を吸収して欲しいと思う。現代の地球規模の問題は、たとえば難民問題にしる環境破壊にしるエイズ対策にしる、学問の枠を越えなければ解決の道筋が見えてこないものが多い。

けれども同時に、実際どのくらい各学問領域が有機的に連合し、本当に新しい研究成果をもたらすのかについては、不安を抱くのも事実である。たとえば、理系と文系の間の溝は、広くかつ深い。一橋の学生はなかなか優秀だと赴任して思ったが、それでも医学雑誌からの文献を読ませると理解力がたんと落ちてしまう。

別領域にこそ批判的かつ建設的な分析をしていくことがこれからの学問には必要だと思う。その底力をつけるのは簡単ではないと思うが、若い学生時代こそ枠を狭めずに、節操もなく知を漁ってほしいと思う。そして自分なりの獲物をもって、教官を煽ってほしいと思う。